

これからの教員に必要な「生徒指導力」についての一考察

— 中学校現場での事例と生徒指導論の講義から —

One consideration about the student guidance necessary for teacher in the future

Through making use of the talks with the child, and bringing up a self-useful
feeling

キーワード：「受け止める」「認める」「待つ」「子どもと学校」
「感じ取れる心」「自己指導能力」「寛容さ」「信頼関係」

菅原 敏彦
Toshihiko Sugawara

要 約

これからの教員に求められる資質能力として、「授業力」「生徒指導力」「子ども理解」等が挙げられる。昨今のいじめや不登校等の生徒指導上の問題については、早期発見・早期対応、問題行動の未然防止等が強調されている。心のケアへの対応、教育相談やカウンセリングの知識や技能を身に付けること、関係機関との連携、組織的な対応についても各自治体から出される答申等に盛り込まれている。それらの答申等には、積極的に大人が「教える」「育てる」という視点が強調されてはいるが、子どもを「受け止め」「認める」とい視点は少ない。

本稿では、中学校現場での事例と生徒指導論の講義で扱った河合隼雄著「子どもと学校」にかかわる学生のレポートから、子どもの「今ある姿」「存在」そのものを「受け止め」「認め」、生徒指導の目的である「自己指導能力の育成」には、教員にどのような資質能力が必要であるかを論ずる。

1 はじめに

めまぐるしく変わる現代社会にあって、子どもを取り巻く環境の変化は、相当な速さを感じる。その変化に対応しようとする子ども自身は、自らのストレスや疲労をあまり自覚せず、日々忙しく過ごしているような状況が見られる。自分がいて「心地いい」と思える空間が見つけれなかったり、没頭して自分の好きなことに取り組むことができなかつたり、子どもが素直に自分の思いや願いを表現する場が非常に少なくなっている。

増加し続ける不登校の現状や、他人の気持ちを察することができずに深刻化するいじめの実態からも、子どもが楽しめる空間や時間を確保し、じっくりとゆっくりと考えをめぐらし、自らの思いや願いを楽しみながら、何かに没頭できるような場を創って行くことが大切である。このような場をつくっていくためには、子どもを取り巻く大人の側にゆとりが必要である。「育てる」「教える」というより、子どもが「育つ」という、「育っていく」ことを認める機会を増やすことが重要である。

2 学校現場での事例と河合隼雄著「子どもと学校」について

学校現場では、いじめや不登校の問題が取り上げられ、教員はいじめや不登校についての説明責任が求められている。重大な事件につながることを未然に防ぐということから、教育委員会や関係機関等への連絡・相談にも積極的に取り組むように促されている。いじめが起きないように、不登校が出ないようにということが、やや前面に出ているために、教員は未然防止のために、いじめや不登校等の問題に取り組み、「待つ姿勢」よりも「働き掛ける姿勢」の方が強くなっている。学力問題についても同様に、授業で積極的に「教師の働き掛け」が議論されるようになってきていることを、授業検討会等で実感する。

さらに、学校は学校評価や進学実績等の数値を上げるために、教師と生徒の信頼関係を構築することよりも、マニュアルに沿った対応が多く見られる。

生徒指導論を受講した学生は、河合隼雄著「子どもと学校」を読んで、次のような感想を記している。

実際、私はある教師が教え子の合格した大学名のみを見て一喜一憂していた現場を見たことがある。私は失望に包まれた。この光景を小中学生が見れば、頭の良さだけを求めてしまい、個性を失いかつ一様序列性の考えを持った人物になってしまうことは想像に難くない。これは、教育者として絶対に避けなければならないことだ。

さらに、教師への不信感を記し、自らの教師像を描く学生は次のように記している。

私は本大学に早くから興味を持ち、高校2年時には既に本大学を志望していた。だが進路調査の際、担任の教師に何度も志望校の変更を持ちかけられたのだ。「東北大学や宮城教育大学にも教育学部はあるではないか。なぜそこを志望しないのか。受験から逃げているのではないか。」等と散々言われた。私は前に述べられた2つの大学よりも福祉大学で学んだ方が自分の理想とする教師像に近づけるからだと説明したが、教師は中々聞く耳を持たず、説得に苦勞したことを覚えている。進学校としてある程度の実績を収めたいという気持ちは十分に理解できる。だが、生徒の希望を尊重せずに実績を優先する学校は、極論すると入学者を集めるだけ集め、不幸な卒業生を輩出する機関となっているのではないかと。ゆえに私が教師となり進路指導を受け持った際は、生徒が「どこに」進学するかではなく、「なぜ」そこに進学するかを大切に、尊重し応援したいと考えた。

このレポートからわかるように、学校は進学実績をはじめとする様々な数値目標を掲げ、その実現に努力をしている様子が見える。そこには「教師と生徒との信頼関係の構築」には結びついていないことがある。

本稿では、学校現場での事例や生徒指導論で扱った河合隼雄著「子どもと学校」から学生が意識を高めた話題等を取り上げながら、これからの教師にとって必要な生徒指導について論ずる。

河合隼雄著「子どもと学校」は、1992年初版であるが、現在でも、生徒指導を中心とした教育について考える機会を与えてくれる。「教師と生徒との信頼関係」「不登校の問題」「道徳教育」等については、今なお示唆に富む話題が豊富である。

3 事例から分かる「子どもと大人との信頼関係」の重要性

子どもと大人との信頼関係の重要性を象徴する3つの事例をはじめに挙げる。それぞれの事例で「分かったこと」としてまとめたものは、当時の教職員や保護者との会話やメモに基づいている。自分自身が直接かかわった事例もある。

(事例1) 校舎を徘徊したり、授業を妨害したりする生徒への対応

ある中学校で、1年生の時から授業を受けずに、授業を妨害したり、教室から抜け出したりするHがいた。休憩時には、友人とのトラブルから時には暴力を振るっていた。Hがいる教室には、当時の教頭並びに学年のスタッフが常時滞在し、授業参観を兼ねて、声かけとその場にあった指導を続けた。

2年生になってから、Hと同じように行動する生徒が増えて、授業を妨害したり、教師に暴力を振るったりすることが頻繁に起こった。火災報知器をいたずらしたり、教師に暴力を振るったりして、自らが消防や警察に電話をするということまで起きていた。

問題行動を起こす生徒の保護者には、学年主任や管理職が連絡をして、学校での状況を伝え、その様子を見てもらうべき働き掛けを行った。しかし、一向に改善されなかった。そのため、当時の校長は別室で、ゆっくりと心を開く時間を持てるようにした。自らが別室で生徒の話を聞いた。

この事例から次のようなことが分かった

- ① 問題行動を起こす生徒は、それぞれに家庭的な問題を抱え、心が通う親子関係が構築されておらず、つねに「誰かにかまってほしい」「かわいがってほしい」という愛情欲求が強いということ。
- ② 小学校時代から問題行動があり、小学校では場当たりの、つまり、その場が収まればいいという感覚で指導されてきたということ。
- ③ 生徒が「面白い」「もっとやってみたい」「これはどうなっているのだろうか」というような魅力的な授業が行われていないために、問題行動を起こす生徒の姿に共感し、授業を妨害する生徒が増えていくということ。
- ④ 授業妨害、授業離脱という事実のみにとらわれ、生徒がなぜそのような行為をおこなうのかという背景を教師が理解するまでに至っていないということ。

(事例2) 自宅がたまり場になっている生徒への対応

母親が亡くなり、父親が不在という状況で、Mと姉が暮らす中学生は、学校を休みがちになり、担任が迎えに行っても顔を出さず反抗的な態度であった。Mの家は、同級生や先輩のたまり場となり、常時Mと姉以外の友人や先輩がいる状態となった。当時の生徒指導担当のS先生が放課後に足を運び、生徒とのコミュニケーションを大切にしながら、少しずつ話ができるようになっていった。

S先生は、Mと姉二人だけの生活なので、時にはカレーなどをつくって食べさせることもあった。担任との関係は上手く行かなかったがS先生を信頼するようになり、友人や先輩とのトラブルはS先生に相談するようになっていった。次第に学校にも顔を出すようになった。

この事例から、次のようなことが分かった。

- ① 登校させようという思いだけが担任に強くあり、Mとの信頼関係を築くことに力を注ぐことができなかったということ。

- ② M自身は、自分の家に友人や先輩が来てほしくなかったと後で言っているが、親がない寂しさを、友人等との遊びで紛らわし、吸いたくもないタバコを無理して吸っていたということ。
- ③ 寂しがり屋でやさしいMは、話を聞いてくれる人を欲していた。そこにS先生が現れ、指導よりも優先して話を聞くS先生に信頼を寄せるようになっていったということ。
- ④ そばにいて、話を聞いてくれる人の存在が大きいということ。

(1)(2)の二つの事例は、教師が、生徒が今置かれている状況を把握し、その背景を探り、どんなかかわりがふさわしいかを考えて指導することの大切さを教えてくれる。その指導は、生徒が教師を信頼することによって生きてくるものであり、信頼関係の構築にはマニュアルにはとらわれないかかわりが必要となる。時間を超えて、生徒が心を開くのを「待つ」ことによって、課題解決の糸口が見えてくることもある。

さらに、「教える」ことを優先することによって、「受け止める」「認める」という行為が減少し、それによって生徒の心が開いていかなかったことも、現場の状況が教えてくれる。

この二つの事例に対して、次の事例は教師が母親との関係や生徒との関係を優先し、じっくりと待ちながら、信頼関係を構築することによって問題の解決につながった事例である。

(事例3) 空き教室から貴重品を盗む生徒への対応

中学3年の女子生徒Oは、遅れて登校し、体育や技能教科などの授業で人のいない教室から、財布や貴重品を頻繁に盗んでいた。その都度、学校では貴重品の管理を確実に行うように生徒に指導するが、忘れた頃に事件が起こるということが1年以上にわたった。

女子生徒Oが怪しいという噂があったが、現場を確実に目撃することはなかった。当時の生徒指導担当のT先生は、Oとの人間関係を構築しようと考えて、窃盗以外の問題を時々起こす女子生徒Oの家を何度も訪れ、Oとその母親との関係を深めていった。母親は、T先生にいろいろなことを相談するようになり、Oの窃盗についても、確証はないが、お金がないはずなのに高価なものを買うOのことを疑っていた。そのことをT先生に相談した。相談を受けたT先生は、遅れてくるOを見守りながら、頻繁に声をかけていた。あるときOが遅れて登校し、直ぐに教室から出て行って、数分後に教室に戻ってくるという現場を目撃した。空き教室に体育の授業から戻った生徒一人が、財布がないと職員室に訴えてきた。T先生はOの行動に疑問を持ち、放課後にじっくりと話すことにした。T先生はOといろいろなことを約束してきたので、「先生に話しておくことはないか」という一言を何度も続けた。するとOは、財布を盗んだ事実を認めた。Oは、T先生をコンビニのゴミ箱に連れて行って、お金を盗み財布だけを捨てたとゴミ箱から財布を取り出した。

この事例から次のようなことが分かった。

- ① 女子生徒Oが盗みをしているという噂が流れている状況の中で、Oへの不信感を抱く数多くの生徒の言動をコントロールすることの難しさ。
- ② 問題を抱える女子生徒Oとの関係づくりに母親にも協力してもらうことの大切さ。
- ③ 女子生徒Oを疑いながらも、じっくりとOとの話に時間をかけること。
- ④ 安心して話せる人の存在が大きな役割を果たすということ。

次に、教師と生徒の信頼関係が問題の拡大を防ぎ、解決につながった事例を挙げる。

(事例4) 日常のかかわりで構築する信頼関係

H先生が授業後に、クラスの教卓に職員会議で配布された生徒の個人情報の入った紙を置き忘れた。それを見た数人の男子生徒のうち、男子生徒Sは自分のことが書かれているということを知った。母親に関する記述だった。Sとそれを見た生徒は学年主任に訴えてきた。担任Hを責めた。

学年主任は、個人情報が見られた紙を見た生徒数人とじっくりと時間をかけて話をした。特に、自分のことが記されていたSとは、何度も話し合いを続けた。学年主任は、保護者にも正確な事実を報告し、理解を求めた。保護者からのクレームがなかった。

しばらくすると、生徒も落ち着きを取り戻し、担任との関係も次第に修復されていった。生徒指導主事の経験のある学年主任は、日頃から問題を抱える生徒とのコミュニケーションを大切にし、いつも、生徒に寄り添い、時には厳しく指導しながらも、生徒から慕われ、信頼されていた。

この事例から次のようなことを学ぶことができた。

- ① 日頃の生徒との触れ合いを通して、教師と生徒というよりは、一人の人間としての信頼関係づくりが生徒指導を支えるということ。
- ② 教師と生徒の信頼関係が、想像以上のものをつくりだし、昨今マスコミで取り上げられるような大きな事件も、小さなものへと変わっていくということ。

この事例は、ややもするとマスコミに取り上げられ、大きな事件になる可能性があった。昨今では、このような事件があると管理職は速やかに教育委員会に報告し、指導を仰ぐケースが多い。そのことによって生まれるマニュアル的な処理は、教師と生徒との信頼関係を壊してしまうことすらある。

この事例では、学年主任を中心とする先生方が、生徒と遊び、生徒と行事を創り、生徒と楽しむという関係づくりを大切にし、次第に生徒が先生方を信頼するようになっていたから、大事にならずにすんだ事例である。

4 問題行動と向き合うために

教員は、学校現場での事例から多くのことを学び、学んだことを生かして生徒指導上の問題の解決にあたることが多い。かつての研修会で「生徒指導は、事例研究に始まり事例研究に終わる」と言われたことがあった。まさに、事例研究は大切な研修の一部と言える。事例は、生徒への対応の在り方や未然防止、解決の方法等、様々なことを示してくれる。それらの対応や方法は、生徒と教師の信頼関係が土台となっていることを忘れてはいけない。同じような事例で、同じように対応しても、スムーズに解決できないことがある。それは、一人の人間としての信頼関係づくりが異なるからである。

昨今、各自治体の教育委員会等から、「いじめや不登校のマニュアル」などが出されているが、マニュアル通りに対応しても、問題の解決やその後の対応がスムーズに進まないことがある。日頃の教育活動で、教師が生徒を一人の人間としてかかわり、じっくりと話し合いを続け、信頼関係の構築に至らないことが原因の一つと考えられる。

「問題の解決」という表現を用いてきたが、生徒指導上の問題は、数学の問題を解決するように、すんなりと問題が解決できるものではなく、問題とじっくりと向き合い、問題

の背景を探り、少しでもその問題と本人が向き合い、周囲の人間がその問題を理解し、日常生活で負の状態として表面化しないようにすることが極めて重要である。

5 「じっくりと待つ」ことの意味

教育活動で何かに夢中になって遊ぶことによって我を忘れて没頭すること、分かることや納得する面白さを味わい、その学びに没頭する体験が非常に少なくなっている。それは、大人と子どもとのかかわりにおいて、その関係性が大きく変わってきているからだと考えられる。子どもはいつも、大人の管理の下に行動し、危険から遠ざけられている。そのことによって、自分の行動を注意深く見つめたり、振り返ったりすることも少ない。

大人の管理の下にあるから、行動に制限が加わり、遊びでも学びでも、「なんでこうなるの?」「ワー、すごいことが起こった」「危なかった」というような体験が少なくなっている。いろいろな遊びを工夫して、失敗しながらよりよいものをつくったり、ルールを作ったりという試行錯誤も減少している。

この試行錯誤にはある程度のゆったりとした時間が必要であるが、その時間が持たなくなっている。それは、学校でも家庭でも、効率よく物事を考え、効率よく物事を成し遂げ、成果を出すという、「成果第一主義」が、生活の基本となっている場合が多いからだろう。学校の授業などで発する子どもの言葉からもわかる。「そんなの無駄だよ」「こっちの方が速く解けるよ」「この公式を使った方が楽だよ」というような授業中の言葉が教えてくれる。

大人が子どもとかかわる際には、速く一定のところに到達してほしいという大人の思いや願いが優先するあまり、子どもの試行錯誤を許し、じっくりと「待つ」ことが少なくなっている。学校現場では、学力向上のためのマニュアルが、各自治体から出され、授業実践においても、目標到達を優先するあまり、教師の持ち味や子どもの発想を生かした授業実践が影を潜めているような気がしてならない。

このように、大人と子どもとのかかわりが、「じっくりと待つ」ということによって生まれる物事の本質やその事象における本来の姿、一人一人の人間が持っている個性というか持ち味が出にくくなっているのではないかと考える。

この「じっくりと待つ」という姿勢は、生徒指導上の問題を解決する場合に大きな役割を果たすことがある。さらには、教師と子どもとの信頼関係を築く役割をも果たすと考えている。

「じっくり待つ」ということに通じる学生のレポートを取り上げる。

私は、『干渉はしないが、放っておくのではない』という難しい状況に、周囲の者がなるといいのだが、これは修行を積んだ高僧のような境地かもしれない。(河合, 1992, P144) という一文が印象に残った。それは、思春期は多感であり、他者からたくさんの影響を受け、子どもが大人へと成長する大変な時期であるため、一番接し方がわからない頃だと考えるからだ。誰も自分はどうなりたいのか、自分はどんな人生を送りたいのかを自分だけの世界にこもり、自分というものを探している。その時、執拗に接するのではなく、見守ることが必要だと考えた。

こもるという形は人それぞれである。大抵の子どもはそれを乗り越え思春期を過ごす。こもるという形が強くと表れると不登校になり、本当のこもるという状態になる。このような時、自分の内側を見つめ、心の声を聴くことは大事であり、自分が本当にしたいこ

とはなにか考えることは大切である。しかし、周りからするとその子どもの未来に不安を感じるだろう。ずっと引きこもりのままでいたらどうしよう、同年代の子どもたちから遅れをとったらどうしようなど不安は尽きない。そのため私たちはつい執拗に子どもたちに関わろうとしてしまう。実はその行動が子どもにとっては良くないことであり、私たちがしなければならないのは待つということなのである。

私は中学3年の部活を引退した後、毎日のように数時間だけ保健室に通う形を過ごした。部活のキャプテンで1番手を担っていた私はとにかく部活に力を注いでいた。最後の大会を終えて部活を引退し受験勉強に取り掛かろうとしたが、何も手につかず残ったのは虚無感だった。中学で頑張る支えだったものを失った私は教室に行き授業は受けるが、息が詰まり数時間ほど保健室で休み、また授業に出るといったスタイルの学校生活を送っていた。その時、親にも相談できず悩んでいた私を救ってくれたのは養護教諭と担任の先生だった。彼らは、私に授業に出なさいなどとは言わず、保健室に居場所を作ってくれた。何も言わないが、様子をうかがってくれ、私を見守っていてくれることが分かるという環境は私の支えとなっていた。

筆者は「干渉しないが、放っておくのではない」と述べた。この言葉がどれほど大変であるかは誰もが分かるだろう。この難しい状況を成し遂げられた養護教諭と担任の先生を私は尊敬する。最初に述べたように、思春期は多感な時期であり、誰がどう子どもたちに接するかはその子どもにとって大きな影響力となる。子どもが自分はどうなりたいのか自分とは何か自分探しをしているときは、執拗に接しないこと、決して放っておくのではなく見守ることが必要なのだと考えた。私は、干渉しないことの大切さ、子ども自身が抜け出すまで待つことの大切さを胸にとめ、見守ることができるような養護教諭になりたい。そして、私がしてもらったように、子どもたちが安心して訪れる保健室を作り上げたい。

このレポートは「じっくり待つ」ことの大切さを示している。「干渉はしないが、放っておくのではない」という著者の言葉を借りて自らの体験を記している。

問題を抱える様々な生徒がいるが、「自分の内側を見つめ、心の声を聴くことは大事であり、自分が本当にしたいことは何かを考えることが大切である」とも記している。

いじめ問題や学校における人間関係のトラブルで、教師が問題の解決に当たる場合、初期段階での子どもの聞き取りに苦労する。子どもは自分の身を守ろうとするあまり、なかなか真実を語らないことがある。教師としては、問題解決を早急に図りたいという思いがあり、子どもからできるだけ速く真実を得ようとするが、そうすればするほど、子どもはその場をしのげばいいと思うことがあり、自分の心を開いて、本当のことを語らないことがある。

あるとき、こんなことがあった。

駐車場に止めてあった教員の車のタイヤが、鋭利なもので刺されパンクをしていた。PTAの役員や保護者が飾ったイルミネーションの飾りが壊され、点灯できなくなっていた。よく見ると、工具で見事に切断されていた。点灯式を行う当日である。他にもいくつかあったが、工具がないとできないはずが続いた。休み時間や放課後の巡回指導を行い、その後のはずらはなくなった。数日後、生徒から情報提供があった。解決を焦らず、はずらをしたと思われる生徒の言動を観察しながら、生徒自身が名乗り出てくるような場面をつくっていった。しかし、生徒は貝のように口を紡ぎ真実を語らなかった。別の事件で本人を指導する機会があった。常日頃からその生徒との関係を大切にしている学年主任がいた

ずらのいくつかについて本人から事実を聞くとある程度は認めた。しかし、前述した二つの事件については語らなかった。このとき解決を焦らず待つことにした。本人が本当のことを話す機会を待つことにした。

父親の協力も得た。父親の前でも真実を語らなかった。父親が来校した翌朝、生徒と父親が校長室を訪れた。昨夕とは全くちがった親子の姿があった。

この事例からも「待つことの大切さ」を学ぶことができる。日常の触れ合いから得られる信頼関係が、この「待つこと」を実現していくと考えられる。それは、効率を第一主義とするかわりからは生まれることのないものである。

さらに、子どもの存在そのものを「認め」「受け止め」、大人が子どもに対して「教える」ことを優先することよりも、子どもが失敗したり、悩んだりしながら、自ら学び成長しようとしていく姿を見守っていくことが重要である。

ある意味では、関心を持って見守ってくれる人がいることが、子どもの自己実現が表出される要件として重要である。

6 不登校の問題

本学の学生の中に、小中学校時代に不登校経験を持つ学生が少なからずいる。生徒指導上の問題や不登校に関する話題についてゼミ等で学んだり、それに関する著書を読んだりすると、自らの不登校経験を語り出す学生がいる。その時にこんな質問を受けることがある。

「不登校になる場合、必ず原因があると思いますか」と聞かれる。当事者はその原因が分からないという場合がある。家庭で起きる親子関係の問題、友人との人間関係の問題、日頃の学習問題、いじめやかからかいの問題など、様々な問題が考えられるが、当事者は、「よく分からなかった」という。ただ言えることは「自信を失ってしまった。自分自身の存在が分からなくなってしまった。」と言うことがある。

不登校になるまでは、学習面や学校の行事、部活動などに意欲的に取り組み、積極的に行動していたということもある。当事者の話を聞いているうちに、自分の思いを表現することが難しい状況になったり、自分らしく振る舞えなくなったりすることによって、不登校の状態になっていくという過程が想像できる。

これまでの自分は、自分の存在を認めてもらい、自ら主体的に行動することを受け止めてもらい、それが自信につながっていた。そのこと自体が、自分が生きていく上でのエネルギーとなっていた。自分が主人公であるという自分への自信や自己肯定感が生まれる機会が多かったと言える。この機会が減って、安心して学校生活や家庭での生活が送れなくなったりすると、自分の存在を他人に否定されるというより、自分自身で自分を否定し、私という自分を上手に表現できなくなってしまうことによって、不登校状態に陥ることがある。

ある高校3年生の生徒は、仲間と共にバンドを組んで、文化祭に向けて意欲的に取り組んでいた。夏休みも積極的に動き回り、準備を進めていた。文化祭の当日も早朝から活動し、演奏も上手くいった。文化祭を終えると急に学校に行けなくなった。時々保護者が学校に送っていくが、教室には入れない状況が続いた。保護者は一生懸命登校刺激を与えるが本人は動けなくなっていた。その生徒の担任は保護者と連絡を取りながら、待つ姿勢を貫いていた。不登校状態になって半年後、センター試験を迎える。当日行けないものと思っていた保護者に、本人が「送って行って」と要求する。無事にセンター試験を終えるが

思ったような成績は残せず、第一志望はかなわなかった。センター試験の結果にあまり左右されない大学を選び受験を続け、やっとの思いで合格した。

入学後は、新たな仲間との出会いがあり、得意とする情報関係の勉強を続け、サークル活動等に積極的に取り組み、学園祭では中心的な存在として活躍する姿があった。

この事例においても、不登校状態になる原因が本人自身もよくわからないということである。保護者を中心とする周囲の大人が、この生徒の存在そのものを受け止めて、認めて、ささえるという養護の働きがあるときに、この生徒が動き出すということだけは、事実としてあった。

鯨岡峻は、「子どもは育てられて育つ」という著書で、「育てる」という営みには、子どもの主体としての思いを受け止める「養護の働き」と、主体である大人の思いや願いを伝える「教育の働き」との双方向の動きが含まれ、しかも、この両者は逆向きのベクトルをもちながらも不即不離の関係にあると、記している。

受け止めて認めるという「養護の働き」がなければ、子どもに自信や自己肯定感が生まれにくくなり、教え伝えるという「教育の働き」がなければ、周囲の人と共に生活する中で、子どもに「私は私たち」の面が育ってこないと指摘している。

「養護の働き」と「教育の働き」のバランスが、育てるという営みには極めて重要であることが分かる。不登校を経験した学生が次のようなレポートを記した。

「子どもと学校」を一通り読み終え、私は“不登校の「処方箋」”の中に出てきた「さなぎの時期」という言葉に注目した。

筆者は人間にもある程度「こもる」時期が必要だと述べており、それを「さなぎの時期」としている。それは思春期から青年期にかけほとんどの人にやってきて、何もやる気がしない、勉強に身が入らない、これまで興味のなかったものに突然熱中し始めて他のことは何もしないなど、個人によって表れる形状は異なる。そのさなぎ状態がきつい形で表れてしまうと不登校に繋がってしまう。そうした場合に周囲の人間に求められるのは、子どものさなぎ状態を尊重し、待つことである。子どもはさなぎの中で、少しずつ変化を遂げている。その変化を見守り、いずれは子どもが自らさなぎを抜け出してくれるという希望を失わずに待つことこそが、一番良い「処方箋」なのだと筆者は述べた。

私はこの「さなぎの時期」に関して、全面的に同意する。

私は中学一年の頃にここでいう「さなぎの時期」に入ったのだが、入って三日ほどで学校側が一方的に家庭訪問を執り行ってしまった。私にできるだけ早く復帰してほしいと思った上での行動だったのだろうが、私はますます学校に通いたくなくなり、完全に回復するまでかなりの時間を費やした。こもってすぐにさなぎをつつかれた結果、余計に殻を厚くしてしまったのである。

子どもが不登校になってしまった場合、多くの両親や担任教師は焦りを覚え、原因追及や犯人探しを始める可能性がある。それらの一環として、家庭訪問や三者面談などを一方的に計画することもあるかもしれない。しかし、そのようにしてさなぎをつついてしまうと、子どもにとってはかえって逆効果になる。良かれと思って執った行動が殻に刺激を与えてしまい、子どもは殻をより厚くしてしまう。子どもが自らの手で殻を割り、飛び立つのを妨げてしまうのだ。

しかし、さなぎを刺激しないよう警戒しすぎるあまり、子どもを放置してしまうということもあってはならない。特に家族に放置されてしまうと、子どもが「自分はいらない存

在なのか」と不安になってしまう。「待つ」というのは、さなぎから出てくるまで放っておくということではない。今回読んだ本にもあるように、「干渉はしないが、放っておくのではない」という姿勢のことをいうのである。

とはいえ、「さなぎの時期」に入った子どもに対する接し方はかなり難しいと考えられる。実際私も、将来、そういった子どもと対面する際、まずは何をすればよいのかわからなくなってしまうだろう。スクールソーシャルワーカーを目指す身として、その子どもや家族、担任教師に対してどのように働きかければよいのか、これからじっくり勉強していきたい。

次のように記した学生もいる。

自分自身の経験から、私は不登校児について考えることが多くある。特に、何となく学校に行けない児童や、体に異常は見られないのに学校に行くと頭痛がしたり吐いたりしてしまい、学校生活を送ることができない児童に対する教師の対応はどうすべきなのかをずっと考えている。そんな中で今回「子どもと学校」は私の考えにある程度の道筋を示してくれるものだと感じた。以下、この本を読み進めていく中で私が印象に残った部分をいくつか取り上げながら、自分の考えを述べていきたいと考える。

まず私がこの本の中で一番印象に残った部分は、「さなぎ」状態という表現である。筆者は児童生徒が不登校になる状態について「子どもたちも、時に立ち止まって内面を見たり、あるいは内的成熟の進行中は、じっと立ち止まっていたりすることが必要である」と述べ、不登校児にとっては「必要な引きこもり」なのではないかと言う。その「必要な引きこもり」こそが、成熟するためのさなぎのように、内的な世界を成熟させるために児童が選ぶものだと言っている。現代社会では、不登校は教育界の問題として取り上げられることが多い。したがって、「不登校になった」と言う時、「早急に何とかしなければならぬ」と思う人が多いのではないかと私は感じる。しかし当の不登校になった本人からしたらどうだろうか。例えば、外的な世界とのかかわりの中でもまれ、みんなと意見を合わせなくてはならないというようなプレッシャーの中で生きることが無意識のうちに重圧になり、引きこもる。そうしてやっと自分の内的な世界と向き合う機会を自分で作ろうとしたのに、「学校へ来てよ」だとか、「〇〇さんがいないと寂しいよ」などと、教師に言われたクラスメイトからの手紙が届く。これでは休息どころか、もっと外的な世界から遠ざかりたいと思ってしまうのではないだろうか。これはあくまで予測であり、実際に不登校の児童生徒のすべてがこのように感じるわけでは決していない。だが、筆者が述べる「待つ」こととは、そう言った「学校に行かなければならぬ」というプレッシャーを子どもが感じることを避けることなのだと私は考える。

では、何もしないことが結局は良いことということになるのだろうか。そうではない。子どもを放っておくということは、一番やってはいけないことであると私は考える。なぜなら不登校になった子どもは何らかの考えを持って、あるいは無意識のうちに引っ掛かりがあって不登校になっているということが考えられるからである。一か月に一度でも家庭を訪問するなどすることが大事だろう。また、子どもが時に「自分では行けない、背中を押してほしい」と思っている場合もあると考えられる。学校に行くという決断だけでなく、臨床心理士などの専門家と話をしに行くという決断も、ある子どもにとっては勇気のあることである。あくまで子どもの自主性を重んじ、「行った方がいい」ではなく「よき

理解者、話し相手としての専門家がいる」というふうにも子どもが自分自身に起こっていることを把握できるよう紹介したり、背中を押したりすることも必要である。

最後に、今回この本を読んで、不登校に関しての自分の考えをより深めることができたと感じる。また、教師を目指している学生としてこの本を読むだけでなく、将来もしも自分が子どもを持つことになったとしたらという目線からも、この本を読んで子どもとどう対峙していくかについて考えることができたということは私にとって大きな思考の財産となったと感じる。児童生徒が今何を望んでいるのか、何を訴えているのかについて知るために、児童の心理についてもっと知識をつけたいと考える。

近年、文部科学省の生徒指導上の問題調査の結果によると、不登校の数が増えている。少子化にかかわらず増えているという状態が生まれている。このことは、子どもの存在を認め支えるという、大人の「養護の働き」の面が極端に少なくなってきたことが想像できる。学力向上のもとに、大人の「教育の働き」が、極めて増大していると言える。子どもが主体的に学んでいこうとする芽を摘んでいる。

昨今の児童生徒の学習意欲の低下、自分自身への自信のなさにもつながっている。本人も気が付かずに低下していく学習意欲、自信喪失が「不登校状態」を生んでいるとも考えられる。親が中心となる強い「教育の働き」が続くことによって、本人も「不登校になった理由がよく分からない」という不登校の状態に陥るとも言える。

7 これからの教員養成に必要な生徒指導力について

これまでの事例を通して、学校で働く教員にとって必要な生徒指導力について考えてみたい。宮城県教育委員会から平成29年12月に出された「みやぎの教員に求められる資質能力」には、「生徒指導力」として、次のように記されている。

【生徒指導力】

生徒指導は、一人一人の子どもたちの人格を尊重し、個性の伸長を図りながら、社会的な資質や行動力を高めることを目指して行われるものである。このことから、教育課程の内外において子どもたちの健全な育成を促し、子どもたちが自ら現在及び将来における自己実現を図っていくための自己指導能力の育成を目指す積極的な生徒指導の充実を図ることが求められる。

- 学校や学級等の集団内での指導の中で、子どもたちの人間性や社会性、生活習慣や規範意識を育むための適切な生活指導ができること。
- 子どもたち同士又は子どもたちと教員との共感的な人間関係を構築するため、意図的・計画的で適切な学級等の経営と良好な学習環境の確立ができること。
- 授業による学習指導と併せて生徒指導的観点から指導・支援を行うため、子どもたちが充実感や自己存在感を得られるよう教育課程を編成することの重要性を踏まえ、授業や学校行事を改善する視点を持つこと。
- いじめや不登校の問題を理解する姿勢を常に持つとともに、学校全体での組織的対応と未然防止・早期発見・早期対応の視点を持つこと。
- いじめや不登校への早期対応や問題行動の未然防止、心のケアへの対応のため、教育相談の知識と技法やカウンセリングに関する基礎的な知識と技法を身に付けること。

- 組織的に生徒指導に取り組むため、教職員間や保護者、地域社会、関係機関との信頼関係を構築し、行動連携することができること。

求められる資質能力には、生徒指導に取り組む教師の姿勢や考え方が記されている。「積極的な生徒指導」が強調されている。いじめの問題や不登校の問題に教師が積極的に関与し、適切な生活指導、意図的・計画的な学級経営、問題の未然防止・早期発見・早期対応、教育相談の知識と技法等が求められている。

積極的に大人が「教える」「育てる」という視点が強調されてはいるが、子どもを「受け止め」「認める」とい視点は少ない。生徒指導の目的が、子どもが自己実現を図っていくための自己指導能力の育成をめざすものであれば、子どもの「今ある姿」「存在」そのものを認め、自信を持たせることが重要である。自己指導能力の育成には、「自己肯定感」「自己有用感」は欠かせないと考えている。子どもが「育つ」「育っていく」を教育の中心に、さらには生徒指導の中心に据えることによって、子どもが抱える問題とじっくりと向き合える。

これからの教師に求められる資質能力として必要なものは「熱心に子どもに忠告したり教えたりすること」も大切であるが、それ以上に、子どもを「認め」「受け止め」「支える」という行為が極めて重要であると考えている。このような行為は、教師自身が自分の仕事に楽しさを見出すことによって生まれるものである。教師自身に子どもの考え方や環境、今ある子どもの背景を分かるゆとりがなければ、子どもは安心して生活できない。子どもが安心して生活することによって、子どもは主体的に、人や物や事象とのかかわりを通して学んでいく。そのかかわりを周囲の大人が見守ることによって、子どもの主体性が育まれていく。生徒指導の目的である「自己指導能力の育成」につながっていく。

子どもを「認め」「受け止め」「支える」という行為によって、実際に子どもの「自己指導能力」が高まっていったと考えられる学生のレポートがある。

私が中学生の時にクラス内の話し合いで、いわゆる“積極的”な先生がその話し合いを自らハイペースで進め、まったく生徒である私たちに発言の余地を与えていなかったことがある。私たちが主体で進める話し合いの場であったが、もちろん「個性」を発揮をする状況ではないのは明らかであり私たちの士気が高まることはなかった。次に私が母校の部活の練習に顔を出した際に監督が生徒に対して取っていた行動である。普通の部活であればミスが出た瞬間に笛を鳴らし生徒に注意を促す場面で、監督はあえて何も言わずに生徒たちが発言しあい、お互いに感じていることを話し合わせることにゆだねたのだ。その結果監督が伝えようとしていたことを生徒たちは自分たちだけで理解し、ある人は「こうしてほしい」ある人は「それは難しいからこうしよう」と周囲の意見を取り入れ、自分の感じていることを発言しそれぞれの「個性」を発揮して問題を解決していた。これこそ先生自身の判断がその後の生徒たちに影響を与える典型的な例である。生徒たちが「個性」を発揮し合い問題を解決したのは教員が「見守ったから」である。

このレポートは、「教育の働き」の強さが前面にでる教師主体の指導が生徒の主体性を奪っていくということを示している

次の事例では、「憧れの存在」としての教師の姿が、生徒に大きな影響を及ぼすということが分かる。

「子どもと学校」のP225～には思春期の子どもの反抗について書かれている。また、特定の大人に対しては絶対的信頼を寄せると書かれている。私はまさにこの通りであると考えている。なぜならば、私もこの経験者であるからだ。自分で書くことに対して少し恥ずかしさもあるが、私は中学1年生のころ親や教師などに反抗した態度を取ったり、学校でイタズラや悪さをしたりなどまさに思春期のど真ん中であつた。もちろん毎日毎日教師に怒られて迷惑をかけていたことを今でも強く覚えている。しかし、それと同時に、私のことを叱ってくれる学年主任の教師にはとても大きな信頼を寄せていた。この教師は私のやることに対して全力でぶつかってくれたし、何より私の気持ちを理解した上での指導や説教をしてくれた。このような教師に毎日のように叱られていると、次第にその教師に対して信頼を寄せたり、好感が持てたりした。その教師が社会科担当の教師であることから認められたいと強く思い、必死に社会科の勉強をした。そして気づいた時にはその教師に惚れ込み、自分もこんな教師になりたいと思い、更生し、今の自分がある。思春期には人それぞれ様々な形があるだろう。その一人ひとりの違った思春期に対応していくことが(特に中学校の)教師に求められることなのだと感じる。全員の生徒から信頼を寄せられたいなんてことは考えていないが、一人でも多くの生徒の心の拠り所になれば嬉しい。そうするためにも生徒一人ひとりに全力で向き合っていないといけないと思うし、どれくらい大きな物かはわからないがそれなりの覚悟は持っていると思ふ。現場の環境を知らないがゆえにこんなたいそうなことを言うことができるというものもあるかもしれない。しかし、実際に教師になってもこの芯がブレないように今のうちから少しでも強い覚悟と志を持っていきたい。そのためにもまずは教育実習に全力で取り組むことが今私がすべきことであると感じている。教育実習が成功することよりも全力で取り組む気持ちを優先させたい。この「子どもと学校」という本は教師になりたいという私の気持ちをより一層高めてくれた。

今の自分を教師にしっかりと受け止めてもらう中で、子どもに自信と意欲がうまれ、子どもが主体的に「なりたい自分」に向かおうとする姿が見られる。そんな子どもの主体性に気付いた教師が、「なりたい自分」に向かおうとする子どもに、その時に応じた誘いや働き掛けを行い、子どもと教師の間に「学ぶ、教える」という良好な関係が生まれていくということがわかる。

次に、子どもの背景を理解した教師とのかかわりによって、子どもの生活が変わっていく様子を記したレポートがある。

いつもは何事においても一生懸命でよくできる生徒が、いつになくうわの空の状態であることに對し、「それを単純に「悪い」と判断する前に、そのような状態は果たして何を意味しているのか、何のあらわれなのだろうか、という慎重な態度をもって接してゆくことこそ、道徳性の本質にかかわるのではないだろうか。」と筆者は述べている。しかし、これは生徒が学校で見せる表の表情だけを見ては、生活の中の小さな変化になかなか気づくことはできない。果たして、教師を志すわれわれはどのように生徒と関わりを深め、更には日々の変化を捉えていくことができるであろうか。

そもそも、私がこの一文に心惹かれたのもこれまでの経験が大きく関わっている。本書の「IVところが育つ環境」に例として挙げられているB君のような状態に、私自身も陥っ

たことがあるからだ。ゆえに、自分の過去の経験と本書で述べられている事柄を照らし合わせながら、論理的に自分自身を整理していきたいと思う。

私が高校生の頃、友人に自慢できるほど仲が良かったはずの両親が、突然離婚した。母が家を追い出された日はちょうど、私が部活のコンクールの関係で遠方に出かけていたために、妹たちが泣きながら私に電話をしてくれてくれたことでその事実を知った。当時、信じられない出来事に私はどうしたらいいのかわからず、部活の仲間にも、そして顧問の先生にも話すことができなかった。それからというものどんなことにおいても無気力な状態が続き、面白くて続けていた部活動にも行けなくなってしまった。大好きだったアーティストの曲も息苦しく感じられるようになり、更にはこの事態に気付いて接してくれた友人や先生さえも信じられないほどの人間不信に陥ってしまった。当然授業を受けていてもうわの空で、頭では勉強したいと強く思っているのに、先生が放つ言葉のすべてが悲しく聞こえ、集中できない現象が長く続いた。ただ、こんな心理状態であっても家庭状況は悪化していき、教室にも家にも居場所がないとただひたすらに、自分を追い詰めていた。

ではなぜこんな状況にあった私が今、こうして立ち直ることができたのかといえばやはり、担任や学年主任、養護教諭、そして私と真摯に向き合ってくれたSSWがいたからだと感じている。何もできない私を「よく頑張っているね」と励まし、話したいことが言葉として出てくるまで、決して強制的な手段を取らずに粘り強く待ってくれていた。また、これは後になって知ったことだが、学年の先生だけでなくチーム学校として私一人の生徒の様子を先生方同士で共有し、見守ってくれていたのだという。

以上のことより私は、いつも通り学校の教室に入り、授業を受け、まっすぐ家に帰っていくことだけが素晴らしいという考え方はできない。たとえ不登校になってしまったとしても、その状態は生徒にとって必要な居場所であり、精一杯の抵抗なのかもしれない。だからこそ教師を目指すものとして、まずはどんな人ともコミュニケーションを大切に、情報共有を図れる環境づくりを意識して生活していきたい。

これまで、みやぎの求める教師像や学生のレポートから「生徒指導力」について考えてきた。教師の思いと子どもの思いが微妙に異なり、教師の働き掛けが子どもの意欲を高める方向とは反対に向くことがあるということが分かる。日本の子どもたちの「自己肯定感」「自己有用感」を高めるためには「受け止め」「認める」「見守る」「支える」などというような働きが、重要であるということが分かる。

8 これからの生徒指導に必要な「感じ取れる心」

昭和50年代の荒れの時代では、指導するという「教育の働き」が強い生徒指導が求められた。これからの生徒指導では、子どもの今を「認め」「受け止め」、子どもの気持ちや背景を理解する「生徒指導力」が必要である。

「生徒指導力」というよりも、教師自身が一人の人間として、人とかかわっていく中で大切にしたいものと表現した方がいいとも考える。

価値の多様化と言われつつも、今、世界からどんどん「多様性」と「寛容さ」が失われつつある。そのような中で、教師が子どもを一人の人間として見て、子どもの今を「受け止め」「認め」、その時にあった「誘い」「援助」などをゆっくりと行いながら、時には待って、子どもの声を聴くことが重要である。「待つ」という大人の姿勢によって本当の意味での「主体性」を子どもが育んでいくものと考ええる。

「教育の働き」を強めて、問題の解決を急いで、一時的な解決にしかならないことがある。長期的なスパンで教育というものを考え、最終的には子どもが「独り立ち」できるような大人の姿勢が極めて重要である。

教師は学力向上にしても、子どもや大人との信頼関係づくりにしても、教師側で「こんな働き掛け」をしようと考えがちである。「放っておいてはいけない」「教えたい」という思いが強くなるからだろう。子どもの今を見つめながら、子どもの今を認め、子どもの今にどんなことが必要か、ということを感じながら見守り、子ども自身が「こうしていきたい」「こうなりたい」というような思いを感じ取れることが大切である。

教師自身の豊かな体験が、「感じ取れる心」を育てるものと考え。今、教員の多忙化が声高になっている。そのような現状の中で、教師がゆとりをもって考え、行動し、時には遊び心を持っていることによって「感じ取れる心」が高まっていく。

学生に「大学時代はよく遊びなさい」と講義で言うことがある。学生時代の「遊び」が、その後の人生を豊かにすることがある。心の豊かさが、生徒指導力を育てる。つまり、教師自身が一人の人間として、人とかかわっていく術というか「力」「姿勢」みたいなものを身に付けていく。身に付けていく中で高まっていくのが「感じ取れる心」である。「感じ取れる心」が、子どもや保護者の理解につながり、教職員同士の連携につながり、生徒指導が組織的に機能する学校づくりにつながるものと考え。

【参考文献】

- (1) 鯨岡峻著「子どもは育てられて育つ」2013年、慶應義塾大学出版会
- (2) 広岡義之編著「教育実践に役立つ生徒指導・進路指導論」2013年、あいり出版
- (3) 鯨岡峻著「関係の中で人は生きる」2016年、ミネルヴァ書房
- (4) 河合隼雄著「子どもと学校」1992年、岩波新書
- (5) みやぎの教員に求められる資質能力 平成29年 宮城県教育委員会